

日本中國學會報 第七十五集
二〇二三年十月七日 發行 拔刷

不徹底な女たち——廬隱『象牙戒指』が描く「灰城」北京

鄭

洲

不徹底な女たち——盧隱『象牙戒指』が描く「灰城」北京

鄭 洲

一．はじめに

本稿は盧隱（二八九九～一九三四）の長編小説『象牙戒指』（一九三四）にみえる「灰城」北京という意匠を切口に、北京女子高等師範（以下女高師と略す）出身の作家たちの連帯を読み解き、小説に見える不徹底性と退廢性を検討するものである。

『象牙戒指』は、盧隱の親友石評梅（一九〇二～二八）と共産黨員高君宇（一八九六～一九二五）との悲戀に基づく物語である。全二〇章のうち十七章半ばまでは、世を去ったヒロイン沁珠（石評梅がモデル）について彼女の友人の素文（陸晶清がモデル）が語る。残りは同じく沁珠の友人だった露沙（盧隱自身がモデル）と素文の會話が基になり、書簡や日記も挿入されている。

山城の女學生張沁珠は勉學のために北京にきて、同郷の伍念秋と戀に落ちた。が、伍には妻子がいることを知り、さらに伍の妻から夫と別れるよう哀願する手紙を受け取った沁珠は、苦惱のあげく伍との關係を斷つ。卒業後、彼女は北京の中學校で教鞭を執り、同郷の曹子卿と知り合ったが、戀愛不信に陥った沁珠は自墮落な生活を送り、ひた

不徹底な女たち

むきに彼女に求愛する曹を拒否し續けた。曹は象牙の指輪を贈るが、沁珠の心には響かず、獨身を貫く決意を告げる。衝撃を受けた彼は肺の持病を悪化させて死んだ。悲嘆にくれた沁珠は、屢々陶然亭の曹の墓に詣でながらも飲酒や喫煙、ダンスなど自墮落で放縱な暮らしを續け、ある日髄膜炎で急に亡くなってしまふ^③。

盧隱は、『象牙戒指』は親友石評梅の不幸な人生を記念するために事實を忠實に書いたと語っている。先行研究は、高君宇の死後、石評梅が「人の世で戯れる（遊戯人間）」^④と言いながらも、高の未亡人のように振る舞い續けたことを指摘し、この戀愛悲話は「新青年」と「新女性」が新しい時代に古典的な後追い心中を演じてみせたために歓迎されたのだと分析している^⑤。確かに、高石兩人の戀も『象牙戒指』も新舊の價值觀に合致する。しかし、この小説ははたして「事實の忠實な記録」だけにとどまるものだろうか。親友石評梅の半生を小説として組み立てた時、盧隱自身の抱えていた問題が反映された可能性はないだろうか。以下、物語の舞臺である北京に焦點をあててこの問題を論じてみたい。

まず『象牙戒指』の語り手、素文のモデルである陸晶清（一九〇七

（九三）と石評梅、廬隱という女高師出身の作家たちが北京を「灰城」と呼んだことに注目し、この語の使用状況を整理する。次に「灰城」が意味する不徹底性を女高師の三人及び作中人物と結びつけて分析する。最後に、「灰城」北京と沁珠との關係性を讀み解き、小説における不徹底性と退廢性を検討したい。

二、「灰城」北京と女高師作家

『象牙戒指』に現れる北京には、モダンさと退廢的な要素が混在している。中央公園、頤和園、西山、東安市場、協和スケート場、眞光映畫館、北海など、詳細な描寫はないものの、まるでブランド品のように流行の空間がちりばめられている。例えば、一九二〇年代から發展し、三十年代半ばに成熟期を迎えた東安市場は、舶來品を買い求める中上階層の客で賑わうモダンな空間であった。モダンな演出は小説の冒頭にも見える。素文が「私」つまり露沙の家にやってきた時、「私」は冷蔵庫からよく冷えた炭酸水を供し、使用人に賓來香ホテルに電話してレモンアイスクリームを届けさせるよう言う。冷蔵庫、炭酸水、電話、アイスクリーム、どれもモダンな都市風俗の小道具である。ロマンチックな物語を聴くためには、それにふさわしい演出が必要だったのだろう。それらは悲戀物語にフアッシュショナルな雰囲気添えるものだった。

同時期の上海と比べ、北京は新舊混在するイメージで語られることが多いが、この小説では古い下町、例えば張恨水小説が好んで描いた天橋は全く登場しない。廬隱が憂鬱な北京を表現するのに使ったのは、地名ではなく「灰城」という言葉だった。

『象牙戒指』に、北京という語は十五回、「灰城」は十四回登場する。

「灰城」が初めて登場するのは、伍念秋に妻子がいると沁珠が知った後のことだ。故郷から北京に戻った沁珠に何かニュースがあるかと尋ねられた素文は「ニュースはないわ。……北京のような灰城では、重苦しさは打ち破れないでしょう」と答える。さらに曹子卿が亡くなること、「北京」はテキストから消え、全て「灰城」に置き換えられてしまった。そして「灰城」は、ほぼ常に「沈悶」「死氣沈沈」「離開」といった語と組み合わされている。「灰城」は失望から絶望へ向かう沁珠の心境變化に響き合っているのだ。

ここで注意したいのは、「灰城」とは廬隱が創った語ではないということである。筆者の現時点での調査によれば、「灰城」という語の初出は『詩鐫』第六期、一九二六年五月六日に掲載された饒孟侃の「春遊」に遡る。しかしこの語を頻繁に用いられるようになったのは、陸と石の編集による『世界日報』の副刊『薔薇週刊』、及び陸が創刊した『河北民國日報副刊』であることは、石評梅の「給廬隱」（一九二七年一月二十五日）や陸晶清の「整裝之夜——寄美弟」（一九二七年二月一日）などの例から了解されるだろう。一九二八年に石評梅の追悼記念號が公刊されたのち、「灰城」という語は他の書き手、さらに他の新聞雑誌にも現れるようになった。「灰城」は陸たちによる造語ではないとしても、二人が好んで用いて廣めたのは確かであり、二人が編集していた『薔薇週刊』に端を発し、北京が北平に改名された一九二八年以後、徐々にメディアに廣まったようだ。この語の普及は、首都でなくなった北京からは續々と人が去り、この古都が「故都」「舊京」「古城」などの語で稱されることが多くなったという事實と繋がっているだろう。

陸たち三人の「灰城」の使用頻度をみると、陸晶清十七作、石評梅

二作、廬隱五作で陸晶清が突出している。では、彼女たちにとって「灰城」はどんな意味をもっていたのだろうか。以下その特徴をみていきたい。

二一・「灰」の共有

特徴の一つは、友人、特に石評梅との關係を述べる文脈で「灰城」がよく使われるということだ。陸晶清の十七作のうち、十一作は友人に、さらにそのうちの八作は明確に石評梅に言及している。石評梅による二作のうち、「給廬隱」は上海にいた廬隱への、もう一作は女高師出身の呂雲章（一八九一〜一九七四）への書簡として書かれた。廬隱の五作は、『象牙戒指』以外に二作が石評梅と關連している。「愁情一縷付征鴻」は石評梅宛の書簡で、亡夫郭夢良を思い出し、高君宇を亡くした石評梅と自分が同じ運命であることを嘆くもので、末尾に「灰城より」と記されている¹⁵。また、「河畔」は、自らの鬱屈した氣分を綴つたもので、二人の友人との會話で亡くなった石評梅に言及し、さらに「いつか、私の全ての友人がこの寂しい灰城を離れる、そんな日が来た時（略）」と嘆いた。「灰城」は石評梅を中心とした女高師での友情を語るときに好んで用いられた語彙だつたと言える。

「灰城」の背後には、色彩を表す語彙で自分たちの屬する空間を表現したいという彼女たち共通の創作傾向があつたようだ。例えば、彼女たちは女高師を「紅樓」と呼んでいた。紅樓とは北京大學ではないかと指摘した讀者に對して、陸は自分の文章中の「紅樓」は女師大を指すもので、この愛稱は石評梅と自分が作つたのだと明言している¹⁷。陸晶清にとって、校舎の愛稱は親密な同級生たちと共有した女性空間に独自の意味を與えるものだつた。また、女師大事件の餘波で陸が放

逐された後、石評梅は陸の新居を飾り付けて「綠屋」と名づけた。石評梅も陸晶清もこのことを文章にしている。一九八三年、石評梅の作品集の序を書いた陸晶清は「紅樓」「梅窠」「綠屋」などの節に分けて石評梅との思い出を追想している。色彩を冠したこれらの命名からは、言葉以上の深い友情が込められていることが見てとれる。

廬隱と石評梅も同じような名づけを樂しんだ。師大附中の同僚として親密になつた二人は寂しい職場を「白屋」と名付けている²⁰。のちに石評梅の寄宿舎を訪れた廬隱は、廢寺のような門にピンク色の紙が貼られ、「梅窟」²¹と書かれているのを見て「あなたの性格分析にますます興味を持つようになったのです」と書いている。命名が表す文學的趣味と、寂しい中でもなんとか樂しみを見つけようとする性格に廬隱は好感を持つたのだつた。『象牙戒指』に出てくる沁珠の寄宿舎「梅窩」は、石評梅の寄宿舎「梅窠」をモデルにしている。「梅窩」は、小説では曹との戀愛の一部始終を語るための重要な舞臺であるが、現實には石評梅の「梅窠」での生活は一年足らずに過ぎず、高君宇から象牙の指輪をもらつた時にはすでに轉居していた²²。つまり、廬隱は意圖的に廢寺のような寄宿舎を戀愛の舞臺としたのである。それは小説に悲哀を纏わせ、ロマンスを醸し出しただけでなく、石評梅を直接思わせる「梅窩」という言葉で主人公沁珠を表象したのだつた。

「灰城」という語の使用もまた、色彩によつて場所を表象する試みの一つだつたのではないだろうか。陸晶清の詩「哀禱」は初出時には「於綠屋中」と記されているが、詩集『低俗』に収録された際に「於灰城綠屋」と改められている²³。また廬隱は、最も好きな色は灰色だと語つたことがあつた。一九三〇年に書かれた、二番目の夫李唯建（一九〇七〜八二）へのラブレターを讀んでみよう。

灰色は最も美しく、人間の命がもし灰色を帯びていなければ、永遠に靈の世界に棄て去られてしまうでしょう。ご覧なさい、灰色はなんと優しいのでしょうか。火のように熱くなつて人を息切れさせることもなければ、暗闇のように人を迷路に導いたりもしません——私は強すぎる光も賑やかすぎる生活も恐れており、私は灰色の中でいつまでも沈黙してたいのです。²⁶⁾

廬隱にとつては、灰色は靈の世界に出入りするために必要であり、火と暗闇の間であるという理想的な色だった。廬隱が言う灰色とは、恐らく悲哀の感情だろう。『廬隱自傳』は、悲哀は自らの思想の根底に存在しており、「どんなものでも私の灰色の目に映ると、全て悲哀の色彩に染められてしまう」と書き、さらに悲哀を「あの欲に近い快樂の享受と比べれば、ずっと奥が深い。しかも悲哀があつてこそ初めて全てを超越した神靈に近づくことができる」と述べている。廬隱の悲哀とは明らかに欲望と對照をなすものであり、上位概念の「靈」に近づくために必要な感情であつた。

ただ、廬隱が灰色について書いたのは、李唯建宛の書簡であつたことを忘れてはならないだろう。堂々巡りを続ける二人のラブレターでは、廬隱は未亡人であり、李は廬隱より八歳年下であるという事實が注意深く回避された。両者の關係は舊時代には大きな問題とみなされたのだ。吳福輝は、廬隱は幸せを抱きしめたいものの、常にそれが失われることを恐れていたのだと指摘し、そこに若くはない女性のもの寂しさが鮮明に浮き彫りになっている、と述べている。²⁷⁾ また別の先行研究は、重なる悲哀によつて廬隱は無感覺となり、寒暑も感じず世間

と自我を超越したように見えるものの、依然として跳躍する熱い心を垣間見ることができるとし、達觀の背後には執着と熱望が隠れているのはつきりと見えるという。²⁸⁾

これらの指摘を踏まえて、廬隱の灰色が火と暗闇の間にあつたということを変更して確認したい。これは單なる灰色というより、「灰燼」(燃え殻) なのではないだろうか。廬隱は戀愛描寫にしぼしば「殘灰」というイメージを用いた。彼女自身をモデルにした悲戀物語「歸雁」の結末には、「最初に私の殘灰を再び燃やしたのは劍塵だった。今私の心の焰を消したのも彼だ」とある。つまり廬隱の言う灰色とは、表面上は悲哀という燃え殻だが、その下には情熱が燻つていると考えられるのではないだろうか。

「灰燼」は石評梅が多用するイメージでもあつた。女師大事件後、青年たちを勵ます散文「灰燼」の冒頭には「私は希望を灰燼の上に建てたい。だが、それでも私の希望はやはり灰燼になるだろう。灰燼はいつも建築の内にあるが、建築もまたいつも灰燼になる」とある。石の灰燼イメージは力強いが、希望と絶望を行き來するという點で廬隱と共通している。高君宇の死後に書かれた散文では「愁いは心の中に深く埋められている。／私は身體を焼き盡くして灰燼とし、私の情熱を解き放つて逆巻かせたい(略)」と綴っている。『象牙戒指』の沁珠が「人の世は戯れ」と自墮落な生活を送る一方、内心では苦しみもがく様子は、まさに石評梅の「灰燼」と廬隱の「灰色」に合致しており、「灰城」という言葉に厚みを與えている。

石評梅についての先行研究は、女子學生たちがが學校でしばしば擬似姉妹關係をつくりあげたこと、そして彼女たちが共有する空間がシスターフッドの重要な舞臺となつたことを指摘している。²⁹⁾ 「紅樓」「梅

窠「緑屋」「白屋」さらに「灰城」などの語彙は、陸たち三人にとつて、互いに寄り添い、相手の感情に共感し合う場としての役割を果たしたと言えよう。

二二二. 愛憎相半ばする「城」

次に、三人とも北京への愛憎が相矛盾するという文脈で「灰城」を使っていることに注意したい。陸晶清の「整裝之夜——寄美弟」は、北京を離れて革命に赴く際、弟陸萬美へ書いた書簡で、「灰城」について次のように語っている。

このたび私が「灰城」を離れるのは、「灰城」が私をひどく苦しめるからです！ここでは私はどこに居ても懊惱し、どこに居ても憤慨してしまいますので、離れようと決心しました。でも、それもしばらくの間だけです。私は「灰城」に魅入られていますから。⁽³⁵⁾

陸晶清は、「石評梅の訃報を聞いて北平へ赴く船の中で記した日記でも「灰城」という言葉を用いた。

もちろん早く灰城に着きたいが、でも灰城のことを思うと、私はまた震えてしまう。明日、明日私はどうやって灰城に向き合えばいいのか、どうやって灰城に入れるだろうか。一昨年に灰城を離れた時、梅姐が驛で涙をこぼしながら見送ってくれた場面はまだありありと昨日のようであるのに、明晩、驛に迎えに来てくれる友人の中に、もう梅姐はいないのだ。⁽³⁶⁾

不徹底な女たち

何度も現れる「灰城」からは緊迫した感情が伝わってくる。石評梅への追悼文にも「灰城」は現れている。

梅姐、灰城は元々私にとつては母の懐同然でしたが、今は私を悲しませ、とても長くは滞在できないところとなりました（略）⁽³⁷⁾

灰城とは陸晶清を鬱屈させ傷つけると同時に、離れがたい戀しい場所でもある。一方で石評梅は、廬隱がもうすぐ北京に來ると聞いて搖らいだ氣持ちを「灰城」に託した。

あなたがもうすぐ北京に來ると人から聴きました。私は少し困っているの。驛へ迎えに行くべきか、それとも隠れて會わない方がいいのか。あなたが本當に來ると聴き、逆にあなたに會うことが怖くなっています。表しようのない私の心が、あなたに會うとあなたの目の前で粉々になってしまうのではないかと！あなたは、この灰城に一日でも近づいたら、一足でも近づいたら、心が震えますか。すすり泣くのでしょうか。⁽³⁸⁾

親友に會いたいのが、實際に會うとなると恐れを感じてしまう。このような矛盾は、陸晶清の灰城に對する思いとも共通していただろう。そして石評梅は、この手紙を読む廬隱も「灰城」に對して同じような葛藤を抱えているだろうという。彼女たちの間で、「灰城」とは説明を要しない感情のコードのようだ。

陸と石にとつて北京が「灰城」になったのは、當時の政治や社會の狀況とも深い關わりがあるだろう。一九二五年の女師大事件、一九二

六年の三一八事件、その直後の『京報』の彈壓事件（二人は同紙副刊『婦女週刊』の編集をしていた）などが起きた時、二人は北京におり、多くの紛争に直接関わった渦中の人だった。

また、石評梅と陸晶清はどちらも進學のために上京してから戀愛の挫折を味わった。石評梅の経験の一部は『象牙戒指』にある通りだ。伍念秋のモデルである既婚者W君（吳天放）との戀愛に失敗し、のちに高君宇に死なれた石評梅³⁹は高の未亡人のように振る舞い、しばしば陶然亭にある高の墓に詣でている。北京の都心部と南部の陶然亭との往復は、石がこの二箇所以外にはどこにも行き場所を見つけられなかったという閉塞感をも表しているのではないか。

陸晶清も北京で初戀を経験した。陸晶清による石評梅追悼文には、別人のようになってしまった自分の元戀人が、石評梅と自分をひどく傷つけたと書いている⁴⁰。さらに石評梅は別の友人に、失戀した陸が「突発的な自殺でなければ、慢性的な自殺⁴¹」をするのではないかと心配で、北京を去ろうとする陸を何度も引き止めたと書いている。陸が北京を離れることにしたのは、政治的理由のほかに戀の問題もあつたのかもしれない。

廬隱の北京に對する態度は前述の二人とは少し異なる。最初の夫郭夢良が死んだ後、福州にいた廬隱は、一九二六年に娘を連れて上海へ向かった。そこで北京の友人たちに、北京が戀しいが歸れないという葛藤を綴っている。

去年、北京へまた舊交を温めにいらつしやいとお誘いいただきましたが、臆病な私は結局お受けできませんでした。理屈から言えば、北京は元々私の第二の故郷のはずで、七、八歳の時から親し

んできました。（略）北京が私に抱かせる愛情は、出身地である故郷に對してより遙かに親しいものです。（略）でもあなたたちもわかってくれるでしょう、私がどうして行けないか。東交民巷の麗しい月とそよ風、萬牲園の回廊と夕日、中央公園の薄い霜と淡い霧、その全てには私と涵（筆者注…郭夢良）の思い出が深く刻まれているのです！とても行けません。耐えられません⁴²。

この書簡には、北京には思い出が多いからこそ未亡人となった今行くに忍びない、という思いが綴られている。「灰城」という語こそ用いられていないが、北京に感じている矛盾は陸と石に共通していると言えるだろう。

一九二八年以前の廬隱は、陸や石ほどには「灰城」「死城」という言葉を多用していない。一九二五〜二六年に、上海や福州にいた廬隱は北京の政治事件に關わりがなかったから、二人のように社會に鬱屈を感じることはなかっただろう。また、進學のために北京に來た陸や石と比べ、廬隱は少女時代を北京で過ごした。廬隱の作品に、出身地の福州と六歳までいた長沙はほぼ現れないが、『廬隱自傳』は北京の小中學時代の記憶を語っている。しかしやはり彼女にとつての北京は、何といつても女高師時代の友人たちと中央公園や北海公園などを交遊した思い出の地ではなかったろうか。暗い思い出の多い幼少期と比べ、親友たちと出會い、新文學作家としてデビューした女高師時代は、廬隱にとつては目覺めと生まれ變わりを経験した時期だった。『象牙戒指』にちりばめられている流行の空間は、廬隱が自分の青春時代の思い出を掬いあげているという側面もあることを見過ごすわけにいかないだろう。

しかし、『象牙戒指』では、北京を表現するのに途中から「灰城」が用いられた。これは、小説の主な語り手である素文が「灰城」を多用していた陸晶清を原型とすることと無関係ではないだろうが、それ以上に注意すべきなのは、「灰城」が石評梅を始めとする三人の友情と、三人が共有する運命と文學的審美感を表していることだ。この言葉は北京への複雑で不徹底な感情、矛盾だらけの中でもがく沁珠のイメージ、そして沁珠と友人たちが共有する空間を表していると言える。

二二三 「灰城」が描く不徹底な女たち

「灰城」は女高師出身作家三人の間で複雑な感情を表す空間として共有されたこと、盧隱『象牙戒指』はそのイメージを受け継いだと思われることを検討してきた。「灰城」とヒロイン沁珠の造型との関係についてはすでに少し觸れたが、ここでは一通の手紙で沁珠を退場させた伍の妻に注目してみたい。

沁珠が自墮落になった契機は伍との戀の破綻だったが、彼女を實際に豹變させたのは伍の妻からの手紙である。それを讀んで悲しんだだけでなく、侮辱されたと激怒した沁珠は、妻に返事を書くのではなく、伍念秋との絶交を明言し、今までの書簡を互いに返すよう直ちに伍に手紙を書いた。

伍の妻の内容はおおよそ以下のようであった。元々の妻を捨て、自由に戀愛するのが流行しているとは新聞で知っているが、自分は妻として至らないことはないはずだ。同じ女性として、捨てられる女性の苦しみを察してくれるなら、彼と別れてほしい。

汚い字だったと書かれてはいるが、論理は明晰で禮儀正しく、沁珠に哀願するような文體だった。新聞を讀み、婚姻の介入者に夫と關係

不徹底な女たち

を斷つよう自ら手紙を書いているという點で、伍の妻は單なる受動的で従順な舊女性ではなかったのである。

ここで沁珠の受けた衝撃には、盧隱自身の經驗も反映されているように思われる。盧隱は戀人の郭夢良に妻がいたために苦惱していた。親友の程俊英は既婚者との戀愛に反對したが、盧隱は彼と妻の間には愛がないからと氣にしていなかったという。程はさらに、郭に妻を離婚させるよう勧めたが、盧隱は難色を示した。結局、盧隱は、親友たちに反對されながらも、世間の目を避けて郭と上海で簡易な式をあげ、郭と同棲する形で結ばれた。つまり、盧隱は愛のない郭の妻の存在は大した問題ではないと言ったものの、その妻を離婚させ、郭と正式に結婚することはできなかったのだ。當時の盧隱は法律婚より戀愛結婚の神聖性を優先させたのである。同じく正式な手續きを交わさずに魯迅と同棲していた許廣平は、盧隱よりもさらに徹底した態度で「私は舊禮教を打破しようとしたのではないか。だから、互いに氣に入らないことがあれば、言い争う必要も、法律に頼る必要もなく、私はいつでも獨立して生活できるように準備していたので、もしも一緒に住む必要がなくなったら、すぐに別れて各々の道を進む」と考えていたと振り返っている。しかし、伍の妻の手紙を讀んだ沁珠は、盧隱とも許廣平とも異なり、伍との戀愛を斷念して直ちに別れの手紙を書いた。沁珠の行動は、舊道德が覆されたものの、新道德がまだ確立していない時代、自由戀愛を實踐したが、いわゆる「新女性」にはなりきれなかった多數の女性を代表するものだろう。

一方、伍の妻は舊式結婚をしたが、果敢に自分の生活を守ろうとする強さを持っていた。『象牙戒指』に現れるのは、新思想を身につけながらも不徹底なままで苦しむ新時代の女性だけではない。舊式女性

と見なされつつも、新聞を読み、手紙を書くなど新時代の所作で能動的に行動する伍の妻も生き生きと描かれている。従來の新と舊の基準、その境界線は盧隱の描く不徹底な空間で攪亂されたのだった。そして盧隱のテクストが、新になりきれない、舊を貫けないという不徹底さを責めようとする点も注目される。ともすれば新と舊の二項對立に回収されがちな戀愛問題に、『象牙戒指』は別の可能性を示唆したと言えるのではないだろうか。

三、北伐の成功と「灰城」を出られない沁珠

次に、革命軍が灰城に入った際、灰城を出ようとしたが出られないまま亡くなった沁珠の造型を通して、『象牙戒指』が描いた時代の悲劇を検討してみよう。

三一・青天白日滿地紅のはためく「灰城」

「灰城」北京についても一点注意すべきなのは、『象牙戒指』が北伐の成功で終わっていることである。十八章で沁珠が亡くなり、十九章では露沙と素文が沁珠の書き残した日記を読む。十九章の日記には、四月五日から九月十日の發病までの内容が綴られているが、特にこの日記の後半に注目したい。

六月十二日と十五日の日記は、灰城を離れることを決意したと書くが、その後日記は突然中斷する。露沙と素文は、日記帳の最後のページに記述があることに気づいた。沁珠は九月十日も日記を書いていたのである。そこに書かれていたのは、病氣で倒れたが、このまま生を終わらせてもいいという死の豫感だった。つまり、沁珠は灰城を離れようと決心した直後に亡くなったのだ。このドラマチックな展開には

作者のどのような意圖があつたのだろうか。

なぜ沁珠が急に北京を離れようとしたのかも問題になる。戀愛の破綻や情欲の中でもがく沁珠にとつて、北京は鬱屈した「灰城」だったからだろうか。二〇一五年刊行の『盧隱全集』版「象牙戒指」を讀めば、このように解釋するしかあるまい。しかし筆者が一九三八年版の『象牙戒指』⁴⁷と比較したところ、『全集』版の日記は五月十五日以降の一部が削除されていることがわかった。なぜ削除されたのかは不明だが、削除された内容は、革命軍が北京に入ったが何の變化もたらさなかつたという皮肉が主となっている。五月十五日の日記（全集版では一部削除）は、革命軍の到來によつて、「灰城」も自分の中の鬱屈した空氣も一掃されるという夢を描く。だが以下のように書かれた五月二〇日の日記は削除された。

この時には空が明るくなつていたので、私たちはこっそりとドアを開け、外の様子を見たところ、なんと、意外なこと、いつの間にか、全ての店や人家のドアに、あの新しい青天白日滿地紅と青天白日の國民黨旗が挿してあり、朝の風の中ではためいている。誰も知らないうちに大時代が灰城に訪れたのだ。⁴⁸

續く六月二日の日記は、革命軍が北京に入つても世の中はすぐには變化しないと政治を皮肉っている。革命軍への失望は、北京を離れるという沁珠の決意に影響したのではないだろうか。

革命軍の北京入城とは、つまり北伐の成功を意味する。盧隱の小説「畸侶先生」は「灰城」に言及する五作のうちの一つで、まさに北伐成功を背景とするものだ。活氣のない灰城で若者たちは南軍に期待し

ていた。しかし、実際に恩恵を蒙ったのは成り上がりだけだった。將來のためにあちこち交際すべきだと勧められた詩人の崎侶先生は、日和見主義者の時代がきたのだと悟る。彼は最後に孤獨な流浪者になるべく旅に出た。⁵⁰

北伐以降の北京については、周作人も次のように書いている。「北京ではもう青天白日旗を掲げているが、全ては昔のまま、何も變革しておらず、一體北京の革命化なのか、それとも革命の北京化なのか、と尋ねる人がいるが、小生の觀察では、無論後者だろう——そもそもこの革命もともと看板にすぎず、北京に持つてきたらもちろんさらにペンキを塗り重ねる必要がある。」⁵¹北伐が何の變化もたらさなかつたと皮肉っているのは廬隱と共通するものだ。

國民革命軍が北京に入ったのは六月八日、北平と改名されたのは二八日だった。⁵²國都だった北京は北伐成功によって降格し、この日から都ではなくなつたのだ。北京が北平となる新舊の變化を描く作品では、廬隱は「灰城」を用い、時代の變化を青天白日滿地紅旗で表現した。この描寫は國民黨政府への失望を表すが、これは文學者特有の鋭敏さで旗の變化に着目したものと考へうるだろう。⁵³

三一「灰城」を出られない沁珠

こうして、北伐は成功したが沁珠は逆に失望した。彼女は北京を離れようと決意したちようどその時に病で急逝する。北伐成功と沁珠の死が重ねられているのは氣になる點である。確かに沁珠のモデルとされる石評梅は沁珠とほぼ同じ一九二八年九月三〇日になくなつたが、廬隱は、ここにヒロインが灰城と決別するというエピソードを書き加えたのだ。

『象牙戒指』の沁珠は、發病する直前の六月十五日の日記に「チケツトはもう買ったので、明日の朝私はこの灰城と、灰城の中の全てに別れを告げる。再び灰城を訪れる時には、時の流れが全ての紛争を解決してくれていることを願う」と書いていた。⁵⁴ここで石評梅の傳記を確認しておこう。年譜によれば、石は九月十四日と十七日の二度にわたつて北京市内で轉居している。しかも發病當日の九月十八日ですら午前中授業に出ているのだ。⁵⁵この事實から考えれば、石評梅が北京を離れようとしていたとはとても考えられない。つまり、沁珠が「灰城」と訣別を決めたというのは廬隱による創作だということになる。廬隱は、北京が北平になつたことと沁珠の死を關連づけようとしたのではないか。つまり、沁珠は「灰城」を離れられないよう運命づけられていたのではないだろうか。

女高師出身作家に限らず、一九二八年以後の北京描寫には北京が死んだという表現が散見される。徐志摩の「死城（北京的「一晚」）」は「沈み込む、沈み込む。この後、誰が西山の紫氣を懐かしむだろう。彼女は死んだ——灰になつた。北京ももうすぐ死ぬ——」と書く。また、創造社の穆木天は「北京の生活には大いに失望した。私は完全に沈んだ状態で二年間暮らした」が、やがて「死んだ故都を離れて」吉林へ移動したと書いている。故都は死んだ、というイメージは二〇年代の末からこのように表現されてきた。また、三〇年代の北平モダニズム詩人たちは「古城」というモチーフを繰り返し用い、歴史から抜け出せないコンプレックスを表している。⁵⁶

一九三三年、熱河作戦が行われ、五月三十一日には塘沽停戰協定が結ばれた。日本軍は萬里の長城を支配し、いつでも北平に攻めてくるこゝができるようになったのである。⁵⁷『象牙戒指』の連載中には滿州事

變が勃發した。最後の三章は一九三二年末に書かれたはずだが、第一次上海事變のために原稿は失われ、一九三四年の出版直前に書き足されている。その三年の間、中國の情勢は改善されず、北平はずっと危うい状況に置かれていた。『象牙戒指』は北伐で終わっているが、「灰城」北京はそれによって救われることはなく、ただ首都から降格しただけだったのである。盧隱は、町中に青天白日旗が翻っているという描寫で「北京」の時代が終わったことを示唆した。首都北京と共に葬られたのは、二度と戻らない女高師での青春時代と親友の石評梅である。こうした背景のもとで、盧隱は鬱屈する灰城と、新舊の不徹底の中でもがきながら死んでいく沁珠の姿を書き留めたのだった。

活氣を失った元首都、二度と戻らない青春時代への感傷、そして時代の終わりと共に死んだ青年女性。この全てが世紀末のような退廢的イメージを構成したのではないだろうか。モダンな都會が灰城に變じる中で、一人の女性が新舊交代時の「歴史中間物」として不徹底な情欲の中でもがき、モダンな振る舞いによって自らの命を消耗し、時代と社會に反抗しつつ、最終的には街と共に亡くなった。『象牙戒指』は時代の悲劇であるとともに、盧隱らしい退廢の表現とも言えるだろう。

四. おわりに

『象牙戒指』における「灰城」北京は女高師出身作家に共有されていた不徹底な感情を象徴していること、盧隱はそのイメージを用いて新舊が混在する價值觀の中で苦しむ沁珠の物語に用いたことを論じ、政權交代下の「灰城」を出ようとしたが出られないまま亡くなった沁珠の運命を時代の悲劇として描いたことを検討してきた。

盧隱は『象牙戒指』は石評梅を書いていると述べたが、「灰城」という意匠を踏まえて考えれば、『象牙戒指』はむしろ民國中國の「歴史中間物」としての盧隱、石評梅、陸晶清三人の運命をもとに構成したものともいえるだろう。さらに廣く言えば、この物語を支えるのは伍の妻のような「舊い女性」を含め、その新舊の狭間を生きる不徹底な女たちではないだろうか。街の風景から人物の造型、小説での戀愛事情まで、「不徹底」に終わったこの近代化の物語の背後に、傳統社會では考えられなかった同性間の友愛や理解の「徹底」があった。それは過渡期の北京でこそ可能となった新しい到達点であり、モダンイだったと考えられる。むしろ異性間の戀愛の「不徹底」さによって、盧隱、石評梅、陸晶清たちのような不徹底な女たちの間に確固たるシスターフッドが生み出されたとも言えるのではないか。

一九三四年五月十三日、盧隱は難産後の不正出血のために亡くなった。五月二十六日の『北平晨報』副刊掲載の「悼盧隱」には次のような記述がある。

盧隱！新聞が書いてるように、「あなたは五四運動中の一人の知識人、傳統的概念から解放された女性を代表している」（今月二十日大公報の記事を参照）。確かに、この言葉 あなたは認めるべきだろう。しかし、「五四」の激しい潮流が起こした怒濤が轟々と逆卷く中、あなたが眞つ先に立ち向かっていったのだと誰が言ってくれるのだろうか。あなたの不幸な境遇と、不幸にも傳統が残した女性らしい脆い性格のため、あなたは喘ぎ、もがき、一日も安らげず、戦おうとしても、結局無力で、死ぬまでこの怒濤の渦中に沈められていたのだ。あなたが五四運動の十數年後の殉

難者であり、新舊の過渡期の直接の犠牲者であった。いったい誰があなたのために不平を訴えてくれるのだろうか。⁶⁰⁾

追悼文の署名は釋因、女高師時代の盧隱の親友王世瑛（二八九七～一九四五）である。學校で一番親密だった盧隱、程俊英、王世瑛、陳定秀の四人は、戰國四公子に倣って「四公子」と呼ばれるほどだった。王世瑛が言うには、盧隱は當初既婚者の郭夢良と純潔な友情を保ったまま共に歩んでいくと宣言したものの、その言を翻して事實婚に踏み切ったため、徐々にかつての友人たちと音信不通になった。しかし、盧隱が亡くなったあとの無責任な追悼記事にも王世瑛は耐えられなかった。世間は、盧隱は因襲的な弊害から抜けきれない中途半端な存在であり、現實社會を顧みずに自らの悲しみに溺れ、戀愛至上主義のプチブルジョアだったと決めつけたのである。盧隱が不徹底であったのは確かだとしつつも、かつて身近に過ごし、盧隱の先鋭さと勇敢さを目撃した親友として、王世瑛は五四の先驅者としての盧隱を誰も評價しないことに強烈に反發した。王自身は盧隱の戀愛に對する不徹底な態度のために距離を取ったのだが、同じく不徹底な時代を生きる「歴史中間物」として、最終的には彼女の苦境を理解し、追悼文で再び盧隱に寄り添ったのである。戀愛問題に溺れ、苦しんでいる盧隱を、王は咎めつつも嘆くしかなかった。ここにあるのは、わだかまりを解消できないまま親友と永久に別れることになった悔しさ、その不幸な人生への悲しみ、そして彼女が自らの信念を貫けなかったことへのものどかしい思いだ。複雑な感情が絡み合った王世瑛の灰色の追悼文は、盧隱の不徹底さに理解を示した眞摯な證言として讀みうるだろう。

不徹底な女たち

注

- (1) 一九三一年六月より『小説月報』に連載、十七章までが掲載された。一九三二年の第一次上海事變で商務印書館が焼失し、完成原稿が失われた後、残りの三章を書き足して一九三四年五月に商務印書館より單行本として出版された。王國棟編『盧隱全集』卷四、福建教育出版社、二〇一五年九月（以下『全集』とする）、二〇三頁を参照。なお、本稿では別途注記しない限り『全集』のテクストを用いている。
- (2) 主人公沁珠のモデルである石評梅の出身地は山西省平定縣だが、石評梅たちのテクストでは「山城」と呼ばれている。
- (3) 盧隱「象牙戒指」（『全集』卷四）二九～三〇三頁。
- (4) 『盧隱自傳』（上海第一出版社、一九三四）九七頁。
- (5) 林岬「表演『新女性』——石評梅的文學書寫與文化實踐」（『文學評論』二〇一八年第一期）一七七頁。
- (6) 女高師は北京女子高等師範の略稱。前身は一九二二年に成立した北京女子師範學校であり、一九一九年に北京女子高等師範に昇格、一九二四年には北京女子師範大學に改名した。以下「女高師」もしくは「女師大」と略す。王翠艷『女子高等教育與中國現代女性文學的發生』（北京：文化藝術出版社、二〇〇七年）十三頁を参照。
- (7) 盧隱は一九一九～二二に北京女子高等師範國文部に、石評梅は一九二〇～二三に體育部に、陸晶清は一九二二～二六に北京女子高等師範國文部に改名後の北京女子師範大學國文系に所屬した。前掲王翠艷著、十四～十五頁を参照。
- (8) 藤井省三氏は魯迅『傷逝』を論じる中で『象牙戒指』には北京やモデル的な描寫が多くあることに言及されている。藤井省三「魯迅戀愛小説における空白の意匠——『愛と死（原題：傷逝）』と森鷗外「舞姫」との比較研究」（『東方學』二二五輯、二〇一三年一月）八頁を参照。

- (8) 于小川「近代北京公立市場的形成與變容過程的研究——以東安市場為例」(『北京理工大學學報(社會科學版)』二〇〇五年第一期) 五頁。
- (9) 民國學院編『北平廟會調查報告』(北平・民國學院、一九三七年) 五九頁。
- (10) 季劍青「民國北京的現代經驗」(『讀書』二〇一五年第二期) 一五二頁。
- (11) 同注(3)、七〇頁。「沒有新聞……北京這種灰城，很難打破沈悶呢！」
- (12) 北京を「灰城」とする表現について、新聞記事では「全國報刊索引」で検索した上で『申報』『大公報』『中央日報』『民國日報』などを調査した。著作については、二〇年代の北京に滞在したことがある作家や女高師関連の數人の作品を中心に調査を行った。石評梅、盧隱、陸晶清三人のほか、馮沅君、蘇雪林、許廣平、凌叔華、丁玲、王禮錫、李建吾の全集や文集を中心に調査を行った。
- (13) 季劍青『重寫舊京・民國北京書寫中的歷史與記憶』(北京・生活・讀書・新知三聯書店、二〇一七年)、王翠艷『從袁頰『古城』到受難的『母親』城——一九二七〜一九三七年左翼作家筆下的北平形象』(『世界華文文學論壇』二〇一九年第四期、九七〜一〇六頁)などを参照。例えば、「故都」は郁達夫「故都的秋」(一九三四)、「舊京」は賀昌群「舊京速寫」(一九三三)、「古城」は蕭乾「古城」(一九三二)などに見られる。
- (14) 石評梅「溧沁」(『薔薇週刊』第二期、一九二七年四月二六日) 三〜四頁。溧沁とは呂雲章の筆名である。
- (15) 盧隱「愁情一縷付征鴻」(『薔薇週刊』第三五期、一九二七年七月二六日) 三〜四頁。
- (16) 盧隱「河畔」(『薔薇週刊』第八一期、一九二八年十月三十一日) 二頁。「而且我想將來有這麼一天，我所有的朋友，都離開這寂寞的灰城時(略)」
- (17) 晶清「答問」(『河北民國日報副刊』一九二九年四月二十八日) 十六版。
- (18) 石評梅「綠屋」(『薔薇週刊』第六期、一九二六年十二月二八日) 二三頁。陸晶清「綠屋」(『語絲』第一一二期、一九二七年一月一日) 七〜十頁。
- (19) 陸晶清「追記評梅——爲『石評梅作品集』出版而作」(『新文學史料』一九八三年第二期) 八〇〜八二、一〇五頁。
- (20) 盧隱「寄天涯一孤鴻」(『小說月報』第十七卷第十期、一九二六年) 三頁。
- (21) 「梅窟」と「梅窠」という二つの呼稱が三人の作品で用いられている。
- (22) 同注(20)、四頁。「從此我對你的性格分析，更覺興味濃厚了。」
- (23) 「附錄・石評梅年譜簡編(一九〇二〜一九二八)」(『石評梅全集』山西人民出版社、二〇一四年) 五九三頁。
- (24) 陸晶清「哀禱」(『晨報副刊』一九二六年十二月二〇日) 四七頁。
- (25) 陸晶清「低俗」(神州國光社、一九三三年) 八一頁。
- (26) 盧隱「十六——寄異雲」(『全集』卷三) 三〇六頁。「灰色最是美麗，一個人的生命如果不帶一點灰色，他將永遠被摒棄於靈的世界。你看灰色是多麼溫柔，它不像火把人炙得喘不過氣來，它同時也不像黑暗引人陷入迷途，——我怕太強烈的光線，我怕太熱鬧的生活，我願永遠沈默於灰色中。」
- (27) 同注(4)、九二頁。「無論什麼東西，到了我這灰色的眼睛裏，便都要染上悲哀的色調了。」
- (28) 盧隱「寄燕北諸故人」(『晨報副刊』一九二七年一月十五日) 二三頁。「比起那近於欲的快樂的感受，真是要耐人尋味多了。並且只有悲哀，能與超乎一切的神靈接近。」
- (29) 吳福輝「現代文學研究二題」(『海南師院學報』第五卷第十五期、一九九二年) 三一頁。
- (30) 許志英、張根柱「生命活動的藝術結晶——論盧隱作品的情感結構與其

文本形式的對應關係」〔中山大學學報（社會科學版）〕第四一卷第四期、二〇〇一年）三四頁。

(31) 「歸雁」〔全集〕卷三）二二六頁。「最初使我殘灰復燃的是劍塵，現在撲滅我心頭火焰的也是劍塵。」

(32) 石評梅「灰燼」〔婦女週刊〕第四二期、一九二五年九月三〇日）四頁。「我願建我的希望在灰燼之上，然而我的希望依然要變成灰燼；灰燼是時時刻刻的寓在建設裏面，但建設也時時刻刻化作灰燼。」

(33) 石評梅「暮畔哀歌」〔薔薇週刊〕第十九期、一九二七年四月四日）二頁。「哀愁深埋在我心頭。／我願燃燒我的肉身化成灰燼，我願放浪我的熱情怒濤洶湧（略）」

(34) 符傑祥、關海潮「同情」的辯證法——石評梅的『心靈革命』與新女性的根本問題」〔南開學報（哲學社會科學版）〕二〇二一年第四期）三九〇四頁。

(35) 陸晶清「整裝之夜——寄美弟」〔薔薇週刊〕第十期、一九二七年二月一日）四頁。「這一次我離開『灰城』，是因為『灰城』裏給我極深的苦悶！在這裏我處處感到懊惱處處憤恨，所以我要決心離開了。不過這僅是暫時的，因為我原是個迷戀『灰城』的人。」

(36) 陸晶清「海上日記（三）」〔薔薇週刊〕第八五期、一九二八年十一月二七日）二頁。「我固然期望著快抵灰城，但提到灰城時我又抖顫了，明日呵，明日怎忍看到灰城，怎能走進灰城？前年離灰城時梅姐在車站揮淚送我的情景尤清晰如昨日，明晚在車站接我的朋友隊中，已不能見到梅姐了。」

(37) 陸晶清「我哭你喚你都不應」〔世界日報·石評梅女士紀念特刊〕、一九二八年十一月十一日）九頁。「梅姐，灰城原是我的母懷而今竟使我傷心得不能久駐足（略）」

(38) 石評梅「給廬隱」〔薔薇週刊〕第九期、一九二七年）四頁。「間接的聽人說你快來京了，我有點愁呢，不知去車站接你好呢，還是躲起來不見

你好，我真的聽見你來了而我反而怕你，怕見了你我那不堪描畫的心境要向
你面前粉碎！你呢，一天一天，一步一步走近了這灰城時，你心抖顫嗎？
哀泣嗎？」

(39) 廬隱「石評梅略傳」、同注（37）、四〇八頁。

(40) 陸晶清「海上日記（二）」〔薔薇週刊〕第八三期、一九二八年十一月七日）二頁。

(41) 石評梅「致袁君珊之箋五」同注（23）、五八三頁。「她不是急性的自殺，便是慢性的自戕。」この書簡は、一九二六年十一月二十三日に書かれて
いるという。李慶祥「評梅女士年譜長編」〔文津出版社、一九九〇年〕
一六三頁を參照。

(42) 同注（28）。「去年承你們的盛情約我北去，更續舊遊；只恨我膽怯，始終不敢應諾。按說北京本是我第二故鄉，我七八歲的時候，就和它相親相近。（略）它使我發生對它的好感，實遠勝我發源地的故鄉。（略）不過你們應當知道，我為什麼不敢去？東交民巷的皎月馨風，萬牲園的幽廊斜暉，中央公園的薄霜淡霧，都深深的鏤刻着我和瀨的往事前塵！我又怎麼敢去？怎麼忍去！」

(43) 同注（3）、七八〇七九頁。

(44) 程俊英「回憶廬隱二三事」〔程俊英教授紀念文集〕華東師範大學出版社、二〇〇四年）三一頁。

(45) 王國棟「廬隱正傳」〔全集〕卷六）一六三頁。

(46) 許廣平「魯迅年譜」的經過」〔許廣平文集〕卷二、江蘇文藝出版社、一九九八年）三八二頁。「我們不是一切的舊禮教都要打破嗎？所以，假使彼此間某一方面不滿意，絕不需要爭吵，也用不著法律解決，我自己是準備著始終能自立謀生的，如果遇到沒有同住在一起的必要，那麼馬上各走各的路」

(47) 廬隱「象牙戒指」〔商務印書館、一九三八年〕。

- (48) 同注(3)、二〇一頁。
- (49) 同注(47)、二四九～二五〇頁。「這時天已大亮，我們悄悄的開了大門，看動靜，吓，真是奇觀，不知什麼時候，所有的商店和人家的門口，都插上了新的旗幟，那青天白日滿地紅和青天白日的國黨旗，在曉風中招展着，人不知鬼不覺的大時代是來臨於灰城！」
- (50) 廬隱「畸侶先生」(『眞美善』女作家號、一九二九年一月一號)一〇九頁。
- (51) 豈明(周作人)「通信」(『語絲』第四卷第二八期、一九二八年七月九日)三九頁。「北京現在已掛了青天白日旗了，但一切還都是從前的樣子，什麼都沒有變革，有人問，不知究竟是北京的革命化呢，還是革命的北京化？據不佞的觀察，自然是後者爲近，——本來這革命也就只是招牌，拿到北京來之後必然要更加上一層油漆了。」
- (52) 北京大學歷史系『北京史』編寫組編『北京史·增訂版』(北京·北京出版社、一九九八年)四二七頁。
- (53) 廬隱の青年黨黨員という身分に關係している可能性もある。廬隱は一九二七年に青年黨に入黨したという。周蜀雲「憶廬隱」(『青年生活』上海一九四六)第十九期、一九四七年、四二〇～二二頁)を参照。同黨は一九二六年から五色國旗擁護運動を繰り廣げ、青天白日滿地紅旗への變更は共和制の滅亡を象徴していると唱えていた。周遊「旗幟與認同·國民革命時期國民黨以黨旗代國旗與各政治力量的因應」(『人文雜誌』第八期、二〇二二年、一九九～二二八頁)を参照。
- (54) 同注(3)、二〇一頁。「車票已買定，明天早晨我就要和這灰城、和灰城裡的一切告別了。我祈禱我再來灰城時，流光已解決了所有的糾紛。」
- (55) 同注(41)李慶祥著年譜、二二〇頁。なお、袁君珊によると、石評梅は陸晶清と同じように南へ革命に赴こうとしたが、師大附中の校長林砺儒と母に止められて行くのをやめた。袁君珊「我所認識的評梅」同注
- (37) 十一月十四日、四七～四八頁を参照。詳細はさらに調査が必要である。
- (56) 徐志摩「死城(北京的一晚)」(『新月』第一卷第十一期、一九二九年)八頁。「銷沈，銷沈。更有誰眷念西山的紫氣·她是死了——一堆灰。北京也快死了——」
- (57) 穆木天「我的文藝生活」(『大眾文藝』(上海一九二八)第二卷第五／六期、一九三〇年)一五八五頁。「然而北京生活是大失望了。我完全在沈態中住了兩年。(略)我離了那一個死的故都(略)」
- (58) 張潔宇「荒原上的丁香·二〇世紀三〇年代北平」前線詩人」詩歌研究(中國人民大學出版社、二〇〇三年)一〇七頁。
- (59) 同注(52)、四三〇～四三二頁。
- (60) 釋因「悼廬隱」(『婦女青年』八三期、一九三四年)第十一版。「廬隱！像報紙所載的，『你是代表五四運動中，一個智識分子，剛從傳統觀念中解放出來的女性』(見本月二十日大公報)不錯這話你該承認？但是，誰肯說呢，「五四」激潮翻來的怒濤駭浪，澎湃無已，你正當衝。你那不幸的遭遇，與你那不幸的傳統遺下的女性的脆弱的性情，使你喘息掙扎無有寧日。你想抗爭，你終無力。直至於死，你是被淹沒於這浪濤的漩渦中。你是十幾年後五四運動的殉難者，你是直接新舊過渡時代的犧牲者，又有誰替你訴不平呢？！」
- (61) 「廬隱女士·生平，創作，人生觀」(『大公報』天津版、一九三四年五月二十日)十七版。